NHK邦楽技能者育成会 同窓会

現代邦楽「響」

HIBIKI 2020

2020年
3月9日(月)
午後6:00開場/午後6:30開演

渋谷区
文化総合センター大和田
伝承ホール
〒150-0031　渋谷区桜丘町23判21号

ごあいさつ

現代邦楽「響」実行委員会　代表　後藤 すみ子(2期)

本日はご来聴下さり誠に有難うございました。

この会は、邦楽技能者育成会同窓会の企画による、講習会の成果発表の場として開催する会で、現代邦楽「響」の演奏会は、本日で4回を迎えることができました。出席者の、講習から公演のための練習の様子は、進行の度に技術の向上と、音楽に向かう態度、団結力等, 演奏者の表情の明るさが見え、とても嬉しく思っております。

以前、ある著名な方のお言葉に、--- 日本は文化の宝庫である。未来に残すべき文化で、守るべきは日本の文化である--- と、唱えられた方がおられました。明治時代に西洋文明を取り入れるために捨てられた日本の文化も、2013年に世界遺産に認定された（和食)が、それ以来世界で認められ、愛されるように、日本固有の音楽もそうなる日がくることを願ってやみません。

1956年にNHK邦楽技能者育成会が始まり、55期をもって終了致しました。以後は卒業生が集まりNHK邦楽技能者育成会同窓会の名で活動が始まり、来年は10周年を迎えようとしております。この会の会員は、減ることはあっても増えることのない会ですが、日本音楽伝承のため、精一杯努力していきたいと思っております。

「須唄流三章」リハーサル風景
講師：後藤すみ子

「幻舞三章」リハーサル風景
講師：石川憲弘

「オデュッセイア」リハーサル風景
作曲者：新実徳英先生のご指導

「講師の先生方のお言葉」

石川 憲弘
（26期卒業 32~39期講師）

私は育成会を26期で受講した。その時の講師は、日本音楽史が上参郷祐康先生、楽典・合奏が杵屋正邦先生、五線譜・合奏が藤井凡大先生でありそれぞれの先生方に１年間みっちりと講義を受けた。後に私は32期から講師の一員として音階論や楽理などを受け持ったが、育成会はその頃から、一つの講座を一年通して一人の講師が受け持つのではなく、多くの講師が交代で講義をするという形に変わって行った。それはそれで特に音楽史などは専門の講師がその専門の分野だけを詳しく講義するので深く学べるという利点もあるのかも知れない。私も少し羨ましく思ったりもした。しかし私は一人の講師の方に徹底して一年間教えて頂いて良かったと思っている。

「君達は落下傘部隊かい？いつも落ちる。」とニヤリと笑って皮肉を言われる正邦先生や、「一番公平なのはえこひいき。誤解する奴は全知全能を動員して誤解する」と言われた凡大先生の言葉は今でも思い出す。上参郷先生には謡曲のノリに言葉を当てはめる例文で、先生しか読まれないと思って女子受講生の名前を書いたところ、全員の前で読み上げられてちょっと慌てた。

講師になってから分かった事であるが、凡大先生は「育成会の時は全然目立たなかった受講生にたまに地方の演奏会などで出会うと、その地方の三曲会などのリーダーとして見違えるように活躍している」とおっしゃっていた。「響」の演奏会で指揮をしていても、参加者の中に私が教えていた受講生がいて、まさしく凡大先生の言葉が思い出され、感銘を受けることが多い。

また私の作曲の師匠である牧野由多可先生は「育成会では石川さんが先輩だからいろいろ教えてくれよ」と冗談を言われたことも懐かしく思い出される。

受講生の皆さんは、期によっていろいろな形態で受講されたわけであるが、特に印象に残っている講師の先生のお言葉があると思う。それはその人それぞれの音楽生活の上での一生の宝である。どうかそういう言葉をたまには思い出していただきたい。

最後にこのような素晴らしい演奏会を開催できるのは、貴重な時間や経費を負担して参加している出演者の皆さんの熱意がもちろんであるが、陰で大変な労力で支えて下さっている実行委員会の皆様のお陰である。この場をお借りして御礼申し上げたい。

「音をつなぐ」

富緒 清律
（33期卒業）

私は大学４年になるときに育成会33期に入会しました。

箏三弦を子供のときから弾いてはいたとは言え、ただ消極的に続けていた自分にとって、ここに同年代の仲間がいることは新鮮で、「これは楽しいかも」と初めて感じた場所でした。

とは言え、古典に浸かった私にとってそこは全くの別世界。

入会試験の際、控室でソルフェージュの楽譜を渡されて呆然としている私を見兼ねた隣の人が、ドの音を移動させて歌うのだとこっそり教えてくれたお蔭で、なんとか試験を終えたことも思い出します。

思えば私に入会を勧めたのは母（15期卒）でしたが、試験の準備については「行けば何とかなる、大丈夫」というアドバイスのみ。

危ないところでしたが乗り切って卒業し、母とは先輩後輩になりました。今になってみると、時代は違うのに先生が同じ、授業の思い出も共通することが多く、今も二人の間では何かの折に当時のことが話題となり、笑ったり懐かしんだりしています。ちなみに母の思い出は凡大先生から「こんなソルフェは3歳の子供でもできるぞ！」と怒られたことだそうです。

今から10年前に育成会の事業が終了したのは残念なことでしたが、そのことにより同窓会という新しい場が生まれました。私がこれまで知らなかった他の期の方々との繋がりができ、あらためて育成会の存在意義を感じています。

「響」「考」の演奏会や懇親の場など、色々な角度から楽しめる同窓会としてこれからも発展することを祈っております。

プログラム

箏と十七弦による「須唄流三章」

箏Ⅰ	五味静子(7期)	伊藤厚勢(12期)	井上千恵子(15期)	大澤善子(18期)
	井上美和(55期)			
箏Ⅱ	小林冨美代(8期)	菊池美恵子(27期)	一色美枝(34期)	中川裕美(37期)
十七弦	枷場比都美(23期)	横山裕子(29期)		

箏合奏のための「オデュッセイア」

箏Ⅰ-1	外山　香(30期)	杉崎真紀(54期)
箏Ⅰ-2	牧野広美(35期)	井口かおり(39期)
箏Ⅰ-3	梁井圭子(49期)	石橋規子(54期)
箏Ⅱ-1	麗明智翔(48期)	飯田智奈美(54期)
箏Ⅱ-2	古宮春海(31期)	馬場千年(54期)
箏Ⅱ-3	花形朋枝(37期)	成瀬朋子(48期)
十七弦-1	合田真貴子(34期)	
十七弦-2	福本礼美(54期)	

＜休　憩＞

曲目解説

箏と十七弦による「須唄流三章」　藤井 凡大 作曲

「すばる」(昴)、すばるぼし、二十八宿のひとつで、六連星、火神、七星、須八流とも言う。古くは六星、後世観測して七星、ミスマルの名もある。西洋ではプレアデス星団、雄牛座の七ツ星のことで、ギリシャ神話で星に変えられた七人の娘と伝えられる。
「昴」には、日昇る、あきらか、たしか、めぐみ等の意がある。
　この曲は、このロマンティックな星に名を借りた三つの楽章から成り立っている。

Ⅰ「須」ス・シュ、しばらく、待つ、すべからく、すべし、用いるの意、箏曲の基本となる技法を素朴に用いたやや速い楽章、二つの主題を持つ。
Ⅱ「唄」バイ・ウタ、仏法を讃うる唄、梵唄のこと、ほめる、となうるの意、ゆるやかな旋律で歌の心をかなでる。
Ⅲ「流」ル・リュウ、流れる、流す、およぶ、めぐる、つたわる、かわる、うつるの意、十七弦のリズムの上に箏の速いスクイ爪の流れが走る。転調の多い技巧的な最終章。　（作曲者）

　福岡の西日本邦楽合奏団の委嘱により作曲、同合奏団の定期演奏会で作曲者自身の指揮により初演された。1979年作曲　（公刊楽譜　曲目解説より転載）

箏合奏のための「オデュッセイア」　新実 徳英 作曲

　箏という楽器は中国大陸より渡来し日本で育った楽器である。私はこの千数百年の歴史を持つ日本の楽器にその伝統とは異質の西洋的香りを時に強く感じる。琵琶や三絃にはない透明な音色感のためかもしれない。が考えてみれば、共鳴体に絃（弦）を張って掻き鳴らす素朴な原理の楽器は世界共通のものであり、私の感じ方が取り立てて変わっている訳でもなんでもないだろう。
　竪琴と横琴とはその背景こそ異質であるが、音色的には多分に同質のものであり、この異質と同質の双方がこの曲の成立の基盤となっている。
　「オデュッセイア」はもともとは古代ギリシャの漂流的冒険譚である。この冒険譚の主人公が夜毎仰ぎ見たに違いない古代ギリシャの天空の星々のイメージがこの曲の主要な楽想と重なり合い、箏群全体の音調・旋法もギリシャゆかりのものであることから、私の曲もこの「オデュッセイア」をタイトルとして戴くことにした。
　曲は三部構成。三群に分かれた計八人の演奏者は各々異なるパートを奏さねばならず時に洋楽的精緻さをはるかに上回るアンサンブルを要求される。

（ＣＤ（28CF－2970）の作曲者ライナーノートより）

1983年作曲　沢井忠夫合奏団委嘱・初演

三面の箏のための「三つのエスキス」

箏Ⅰ	福本礼美(54期)
箏Ⅱ	高須真穂(32期)
十七弦	横山裕子(29期)

「幻舞三章」

指揮	石川憲弘(26期)[32～39期講師]			
打楽器	冨田慎平(賛助出演)	村上響子(賛助出演)		
尺八	山口連山(32期)	岩本みち子(51期)	山本貴之(55期)	
三弦	竹澤かほる(27期)	富緒清律(33期)	河野清鵞(48期)	吉岡五月(55期)
箏Ⅰ	滝川美鶴(30期)	五月女雅(35期)	杉崎真紀(54期)	
箏Ⅱ	菊池美恵子(27期)	梅田佳予子(33期)	五本木茂美(39期)	
箏Ⅲ	古宮春海(31期)	中畝詩歩(48期)	石橋規子(54期)	
箏Ⅳ	枷場比都美(23期)	中川裕美(37期)	花形朋枝(37期)	
十七弦Ⅰ	合田真貴子(34期)	小林千恵子(46期)		
十七弦Ⅱ	高須真穂(32期)	麗明智翔(48期)		

邦楽界の最新動向がひと目でわかる情報誌

毎月１日発行・A4判・770円
（同内容同価格のデジタル版もあり）
お得な定期購読がオススメ（送料弊社負担）

邦楽ジャーナル

㈲邦楽ジャーナルは
【出版・通販・イベント】
3つの柱で運営します。

◆月刊情報誌「邦楽ジャーナル」の発行
◆1900アイテム余の邦楽CD・書籍等の通信販売「HOW」の運営
http://hj-how.com
◆コンサートやワークショップの制作

〒203-0054 東京都東久留米市中央町 6-2-5　代表・田中隆文
TEL042-472-3870 FAX042-420-1099　info@hogaku.com

三面の箏のための「三つのエスキス」　清水 脩 作曲

箏のための作品を初めて書いたのは昭和16年であるから、もう随分前のことだ。最初の曲は箏独奏の「六つの断章」である。もともと私は箏が好きであった。とくにその音色には心情的な魅力を感じ、無条件に惹かれていた。そういう、私自身の感覚的な或種の執着を突き放すことなく、作品の着想にかかるのであった。そして今もそうである。しかし、技法の点では、箏のもつ可能性、というよりは箏曲家の征服しうる限界を探り、その限界をひろげることを心がけてきた。
「三つのエスキス」は、十七絃を初めて使った作品である。　（清水　脩）

（ＣＤ和楽器による現代日本の音楽「響」曲目解説より抜粋）

1961年6月　ＮＨＫ委嘱作品

「幻舞三章」　牧野 由多可 作曲

渦巻く霧の中に　はるか遠く　人の舞って居る姿が見えがくれする。チラチラと　かすかに銀色の光りにつつまれて… 麻酔の幻覚なのか　やがてそれが見る見る近づいてきて　目の前に展開される。一楽章の目まぐるしく変わる拍子　あやしい哀愁をたたえた二楽章　軽快なリズムの上に三弦がちりばめる光の渦　すべてが現実とかけはなれた世界での怪しさにつつまれて　もり上がってゆく
1983年作曲

（家庭音楽会発行公刊楽譜　曲目解説より転載）

あなたの楽器は私達がささえます！

一般社団法人 全国邦楽器組合連合会（全邦連）

一般社団法人全国邦楽器組合連合会とは
1956年に設立した全国の邦楽器メーカー・職人・卸売・小売・楽譜出版社等の会員からなる組織で、以下の各地組合で構成しています。

東京和楽器製造卸組合　東京和楽器商組合　北海道邦楽器商組合　仙台邦楽器商組合
福島県邦楽器商組合　神奈川県邦楽器商組合　静岡県和楽器商組合　新潟県邦楽器商組合
北陸邦楽器商工業組合　長野県邦楽器商組合　中部和楽器商組合　京都邦楽器商工業組合
全国邦楽器糸組合　大阪邦楽器商組合　関西地区卸商組合　関西三絃製造組合
全国邦楽器妙音会　兵庫県邦楽器商組合　中国邦楽器商工業組合　四国邦楽器商組合
九州邦楽器商組合　［本部］光安慶太理事長方＝三郷市鷹野 3-278-1 ☎048-955-4948

◆放送予定◆

「邦楽百番」NHK-FM

NHK邦楽技能者育成会同窓会演奏会
現代邦楽「響 HIBIKI 2020」

2020年 3月 28日(土)　午前11:00〜11:50
※再放送　3 月29日(日)　午前5:00〜5:50
予定曲目「須唄流三章」「三つのエスキス」「幻舞三章」

2020年 4月 4日(土)　午前11:00〜11:50
※再放送　4 月5日(日)　午前5:00〜5:50
予定曲目「オデュッセイア」

NHK邦楽技能者育成会では随時入会の募集をしております。演奏会をはじめ様々な形での活動を予定しております。未入会の卒業生のご入会をお待ちしております。

■ＮＨＫ邦楽技能者育成会同窓会 事務局
TEL 080-9708-1055 FAX 03-6800-2012
E-mail：n.ikuseikai.dousoukai@gmail.com

現代邦楽「響」実行委員会

後藤すみ子（2 期）※代表
横山裕子（29 期）
山口連山（32 期）
高須真穂（32 期）
富緒清律（33 期）
合田真貴子（34 期）
設楽瞬山（38 期）
原郷界山（44 期）
小林千恵子（46 期）
松本宏平（53 期）
福本礼美（54 期）※実行委員長
井上美和（55 期）

出　演　石川 憲弘［指揮］
NHK 邦楽技能者育成会同窓会会員［演奏］

後　援　(一社)全国邦楽器組合連合会
東京都邦楽器商工業協同組合
公益財団法人日本伝統文化振興財団
邦楽ジャーナル　（五十音順）

協　力　舞台スタッフ　(株)琴光堂